

井の頭恩賜公園内に建設する「井の頭文学施設（仮称）」に関する
整備基本プラン

【案】

「太宰治記念文学館（仮称）」及び「吉村昭書斎（仮称）」の整備に向けて
～「文学の薫り高いまち三鷹」からの発信～

平成 29 年 7 月

三鷹市

I 井の頭恩賜公園内に建設する「井の頭文学施設(仮称)」に関する基本的な考え方

1 「文学の薫り高いまち三鷹」としてのまちづくり

三鷹市は多くの著名な作家が住み、多くのすばらしい作品が生み出されてきた、文学の薫り高いまちである。井の頭恩賜公園や玉川上水に代表される緑豊かな三鷹のまちは、明治から大正、昭和の時代から、東京の中心部と武蔵野の自然豊かな多摩地域の境界に位置するまちとして、多くの作家が好んで移り住み、生活と創作の場としてきた歴史がある。

三鷹市では、従来から、美術ギャラリーや芸術文化センター、太宰治文学サロン、山本有三記念館などの既存施設を活用して三鷹にゆかりの深い作家に関する顕彰事業を実施してきた。これまでの取り組みをさらに進め、井の頭恩賜公園に特にゆかりの深い作家に由来する常設的な場を設けることで、「文学の薫り高いまち三鷹」のまちづくりをより深く推進することを目的として、多くの関係者や東京都の協力を仰ぎつつ、井の頭恩賜公園内に文学施設の建設を計画する。

本計画は、平成 29 年（2017 年）に開園 100 年を迎えた井の頭恩賜公園及びその一帯の地域の新たな魅力創出と文化的価値の向上に資するものとする。

2 文学の発信地としての井の頭恩賜公園

武蔵野の自然が今も息づく井の頭恩賜公園は、明治・大正以降、東京の西近郊への関心と自然に叙情を見出す自然主義的な価値観の高まりもあり、多くの作家がこの地を訪ね、移り住むようになった。

太宰治（1909-1948）もまた、作品に井の頭恩賜公園を登場させた作家の一人である。井の頭池とボートが重要な役割を担う

「花火」（1932 年）、ベンチで物思いに耽る様子が描かれる「ヴィヨンの妻」（1947 年）、井の頭恩賜公園で男女が想いを確認し、大胆な行動の引き金となる「犯人」（1948 年）など、登場人物たちは井の頭恩賜公園を舞台に様々な表情を見せている。また、敢えて固有名詞を明らかにして物語を綴っていることから、太宰にとって身近で親しみのある場所であり、読者のイメージを具体化するのに重要な地であったことがわかる。太宰治は井の頭恩賜公園のほど近くに家族と住み、来訪者を度々、井の頭恩賜公園に連れ出した。敷地内には馴染みの茶屋もあり、書簡に「井の頭公園でビールでも飲みませう。」（戸

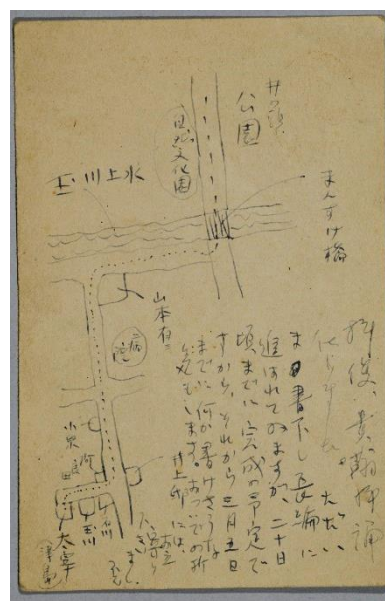


図 1

石泰一宛（昭和17年7月）と誘い、野田宇太郎宛葉書（昭和20年2月13日付三鷹市所蔵）には、自宅へ案内する地図の中に、大きく井の頭恩賜公園を記している（※図1）。

井の頭恩賜公園は今日においても、武蔵野の雑木林の面影、四季折々の豊かな自然と歴史が多く魅力を含んでおり、作家の創作意欲を掻き立てる原動力となっている。李恢成「伽椰子のために」（1970年）、藤田宜永「転々」（1999年）、奥泉光「モーダルな事象 桑潟光一助教授のスタイリッシュな生活」（2005年）、吉田修一「女たちは二度遊ぶ」（2006年）、角田光代「くまちゃん」（2009年）など、井の頭恩賜公園を舞台にした多彩な物語は今日も生み出されている。

このような現代の作家の中で、吉村昭（1927—2006）と津村節子（1928— ）は、井の頭に居を構えて、多くの作品を世に送り出した作家である。吉村は津村と結婚後15年ほどが経ち、作家生活が軌道に乗った昭和44年（1969年）からこの地に住み、歴史小説、戦争小説、随筆にわたるまで膨大な作品を残し、数々の賞を受賞した。また、少女小説から出立し、芥川賞作家でもある津村は、現在もこの地で創作を続けている。

井の頭恩賜公園は、作家が憩い、文学が脈々と受け継がれる場所となっている。

3 これまでの取り組みと背景

三鷹市では、山本有三記念館を中心とした様々な取り組みや、太宰治に関連した「太宰が生きたまち三鷹」の顕彰事業、「吉村昭文学回顧展」等の企画展示を多数開催してきた。三鷹市及び公益財団法人三鷹市スポーツと文化財団がこれまでに開催してきた文学関連の事業は多岐にわたる。

このように多くの作家に愛された歴史的背景、協働による芸術文化のまちづくりの取り組みのなかで、特に三鷹に住まいを構えた太宰治、そして、同じく三鷹に住まいを構え、太宰治賞初代受賞者である吉村昭への注目度は高く、常設的な展示施設を設置する機運が高まっている。

4 施設整備の基本的な考え方

井の頭恩賜公園内に設置する文学施設では、太宰治と吉村昭の遺品や資料等を保存・展示するほか、来館者、ボランティア等の交流や朗読会等のイベントを想定し、公園の来園者の休憩所ともなる喫茶スペースを整備する。

太宰治記念文学館（仮称）及び吉村昭書斎（仮称）の整備にあたっては、平成29年（2017年）に開園100年を迎えた井の頭恩賜公園及びその一帯の地域の新たな魅力創出と文化的価値の向上を基本とし、公園管理者である東京都と調整を図りながら進める。

【施設の位置】

井の頭恩賜公園西園北側万助橋付近

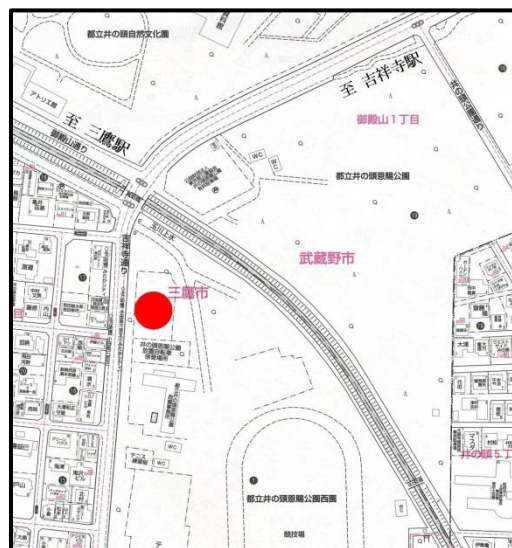
【施設の規模】

既存樹木をできるだけ保存するなど、樹林をはじめとした公園の環境に最大限配慮した施設規模、景観、構造とすることを前提に、

太宰治記念文学館（仮称）約 500 m²（延床面積）

吉村昭書斎（仮称） 約 30 m²

を想定し、東京都と調整中



Ⅱ 太宰治記念文学館（仮称）整備の考え方

1 事業の目的と背景

太宰治は、昭和 14 年（1939 年）9 月から亡くなる昭和 23 年（1948 年）6 月までの間、疎開期間の一時期を除き三鷹市下連雀で過ごし、多くの作品を執筆した。作品の中に三鷹あるいは井の頭恩賜公園が頻繁に登場するなど、三鷹に最もゆかりの深い作家のひとりである。

太宰治に関しては、以前から市民が主体となったグループによる研究活動が行われてきた。平成 4 年（1992 年）には、当時の三鷹市文化振興事業団が、太宰治の妻である津島美知子氏ほか多くの方々の協力で「太宰治展―「斜陽」の時―」を開催し、平成 10 年（1998 年）には、没後 50 年を機に、筑摩書房主催の「太宰治賞」を共同開催することとし、企画展「太宰治展―一心の王者―」を吉村昭や高橋源一郎ほか多くの作家や研究者等の協力で開催した。

平成 20 年（2008 年）には没後 60 年、平成 21 年（2009 年）には生誕 100 年を迎えることから、太宰治をテーマとした文化事業及び観光事業を展開するために平成 19 年（2007 年）に「太宰治プロジェクト検討会議」を設置した。その取り組みの一つとして、平成 20 年（2008 年）には、太宰治に関する情報交流と発信の場として太宰治文学サロンを開設した。同年には、「太宰治 三鷹からのメッセージ―没後 60 年記念展―」、翌年には「太宰治の肖像―生誕 100 年記念写真展―」を開催し、太宰治と三鷹のゆかりの深さを市内外に発信した。

平成 26 年（2014 年）、三鷹市は、太宰治の遺族である津島家から三鷹にゆかりのある貴重な資料の寄託を受けた。それらの資料を広く公開するために、平成 27 年（2015 年）と平成 28 年（2016 年）に「津島家寄託 太宰治資料展」を開催した。企画展以外にも、太宰治文学サロンにおいて、年 3 回の企画展示や定例朗読会を開催するとともに、ガイドボランティアによる来館者との交流や案内を常時、開催している。

このように三鷹市は「太宰が生きたまち」として、長年にわたって太宰治の顕彰の取り組みを継続しており、市や公益財団法人三鷹市スポーツと文化財団による取り組みに加えて、太宰愛好者を中心とした市民による独自の取り組みが多数あることが三鷹市の特色である。これらの蓄積を発展させ、さらにまちづくりに活かすことを目的として、常設の「太宰治記念文学館（仮称）」を設置するものである。

2 施設整備の基本理念

「太宰が生きたまち三鷹」の発信拠点となる「太宰治記念文学館（仮称）」は、三鷹を訪れてこそわかる「太宰が三鷹に生きた証し」を現在に伝え、太宰文学を理解する上で重要な「人間・太宰治」を顕彰する施設とする。

太宰治に関する関連施設と全国的な連携を図るとともに、「太宰が生きたまち」であるからこそできる調査・研究や資料収集についても力を入れる。

また、国内外の太宰治愛好者が集い、情報交換をする場となるとともに、ガイドボランティア等で主体的に活動する市民の活動拠点として、太宰を愛する市民が、太宰を愛する来街者と交流する場となるように整備する。

3 施設計画の概要

(1) 常設展示室

常設展示は三鷹時代の太宰治に特化したものとし、仕事部屋の復元やジオラマなど、視覚効果によって、太宰治が三鷹に生きたことを伝える展示とする。また、津島家より寄贈・寄託された資料を中心に、太宰治の自宅写真などを基に、当時の太宰一家の生活が垣間見られるような空間を創出する。

三鷹駅前の太宰治足跡案内の映像などを館内で常時上映することで、来館者が、太宰が三鷹で過ごした9年間を把握できる展示とする。

(2) 企画展示室

年に複数回の企画展を開催し、様々なテーマ設定によって多角的に太宰治を捉える。寄贈・寄託・購入などによる新収蔵資料公開の場としての機能も果たすことで、館へのリピーターを確保する。

(3) 収蔵庫

収集・保管事業を行う場として、収蔵庫、荷捌室等を設ける。充実した企画展示の開催を想定し、他機関からの資料借用が可能であり、また、寄贈された貴重な展示物を安全に保管できるように、高いレベルの安全性を備えた収蔵庫を設置する。

(4) 交流・サービス機能

文化観光事業、地域連携事業、利用者サービス事業等を行う場として、喫茶

スペース及びミュージアムショップを設ける。

喫茶スペースについては、朗読会やミニ講演会などのイベントも想定し、多目的に活用できる空間とする一方、井の頭恩賜公園の来園者の利用も可能な配置とする。展示公開部門との利用時間帯が異なる場合を想定し、喫茶スペース単独での運営を可能な配置とする。

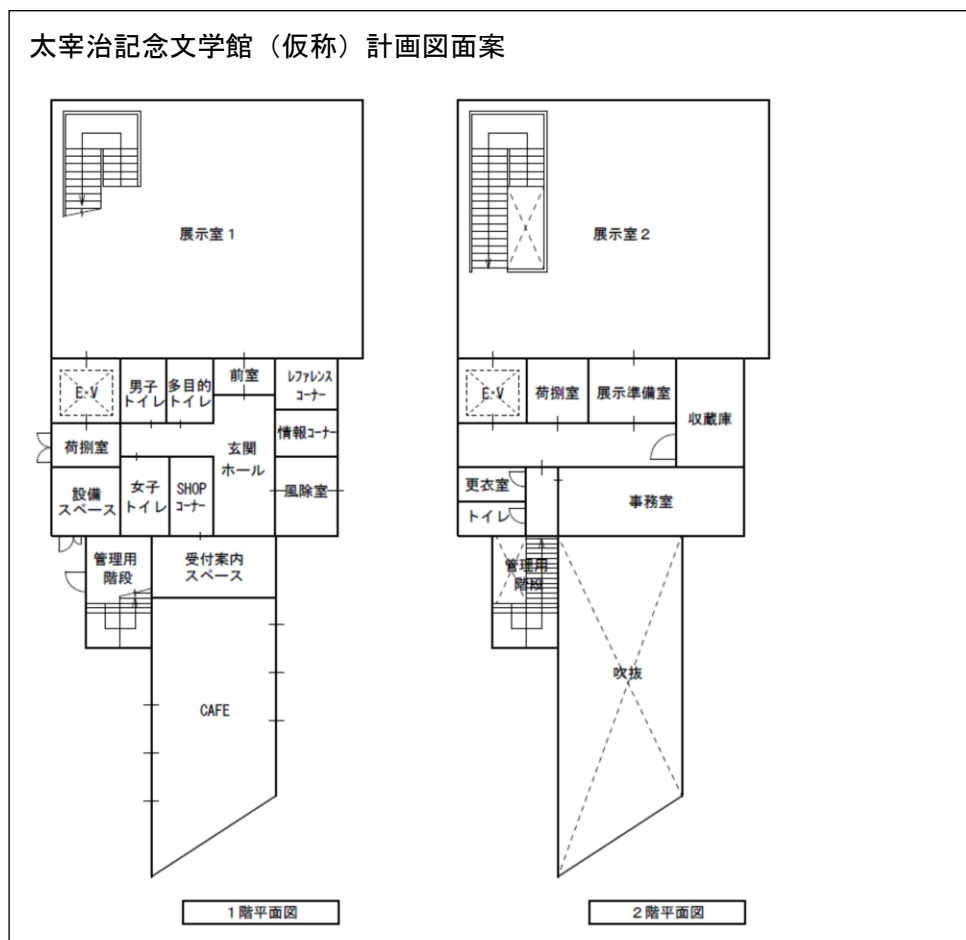
(5) 情報提供機能

情報提供・発信事業・教育普及事業等を行う場として、情報コーナー・レファレンスコーナーを備える。オンライン資料を活用し、外部と連携した調査研究の場、文化観光事業の場としても活用する。

(6) その他

施設の管理運営機能に加えて、展示解説等を行うボランティアの活動拠点等を確保する。

また、エントランスホールでの案内機能や、多目的トイレを含むトイレの利用、喫茶スペース等については、公園利用者への利用提供も想定する。



Ⅲ 吉村昭書齋（仮称）整備の考え方

1 事業の目的と背景

吉村昭は、井の頭恩賜公園にほど近い三鷹市井の頭に長年居住し、「戦艦武蔵」「破獄」「三陸海岸大津波」「関東大震災」など、多くの作品を発表してきた、現代の人気作家である。吉村昭には、執筆活動に打ち込んだ自宅敷地内の書齋より眺める公園の風景を愛し、調査旅行を切り上げて帰宅し執筆にあたったとの逸話も残されている。

吉村昭は、妻の津村節子氏とともに、文学賞の候補者となるたびに、井の頭恩賜公園内の弁財天に受賞を祈願していた。吉村昭は昭和41年（1966年）に新人文学賞である太宰治賞の初代受賞者となるなど、間接的ながら太宰治とゆかりがある。

三鷹市では、これまで「吉村昭文学回顧展」（平成19年度）、市制施行60周年記念展「三鷹ゆかりの文学者展」（平成22年度）、「作家 津村節子の成果 一夫 吉村昭とともに」展（平成27年～28年度）を開催しており、顕彰事業の継続と文化発信拠点として、書齋を移設して常設的な展示施設とし、三鷹図書館が所蔵する多くの初版本等を併せて公開することで、「文学の薫り高いまち三鷹」としての魅力向上を図ることを目的とする。

なお、三鷹市は、津村節子氏及び吉村家から、書齋を市に寄贈した上で井の頭恩賜公園内に移設し、保存・公開することについて承諾を得ている。

2 施設整備の基本理念

吉村昭は、歴史小説作家として、徹底した史実調査に基づく記録小説を数多く世に送り出しており、執筆活動を行っていた書齋は、本棚により天井まで本がそそり立つ濃密な空間であり、地図や歴史書を広げられる大きな机など、文学的価値が高い。

本施設計画は、吉村昭の執筆活動の原点とも言える空間を垣間見ることができ施設として、公園内に書齋を移設・再現し公開することで、作家・吉村昭を語り継いでいく上での重要な「場」となることを目指す。

3 施設計画の概要

(1) 書齋及び和室の移築

書齋と和室は既存の家具と内装を再利用する事で、形状だけでなく、雰囲気等を含めた空間を再現する。吉村昭の作品や日記、机の上の文房具等を展示することで、当時の執筆活動空間をより鮮明に把握できるようにする。

また、書齋、和室に関しては進入可能エリアを予め区画することで、展示されている書籍や文房具等の価値あるものに直接手が触れることを防ぎ、破損、

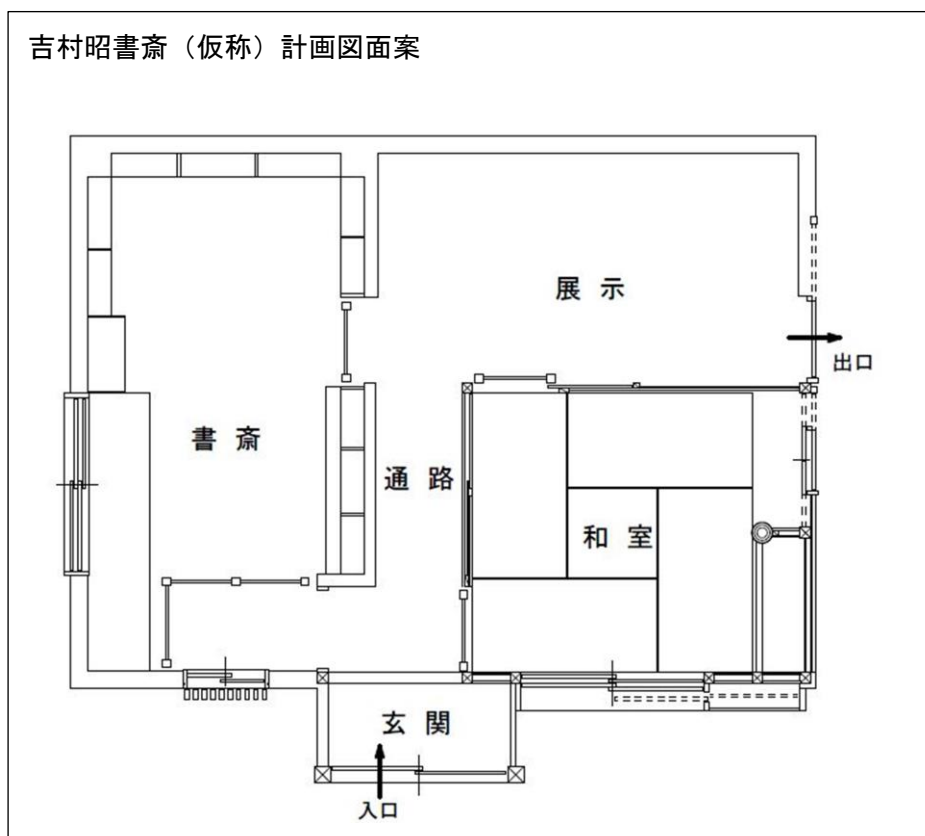
盗難を防止する。

(2) 展示機能

移築した書齋の中に展示機能を持たせるために、既存のトイレや水場等を改修して展示室とし、吉村昭、津村節子の執筆活動に関する資料や当時の書齋の写真等を展示することで、来館者に吉村昭・津村節子の作品等をより身近に感じてもらえるよう整備する。

(3) その他

構造体に関しては、現行法規に適合した構造にするとともに、施工性、耐久性を考慮し、新たに軽量鉄骨造で構築する。外観に関しても既存と同様の形状で再現する。



IV 管理運営計画

1 管理運営の基本的な考え方

施設の運営にあたっては、文学館としての基本的な機能である「資料の収集・保存」、「調査研究」、「展示公開」、「教育普及」の活動を継続的に行っていくため、長期的な展望に立ち、資料、情報、研究成果や、それらを活用するノウハウを蓄積していく。

また、経営的な視点を取り入れた効率的・効果的な運営が行えるよう、文学館関連の事業実施について過去 20 年間の実績を持つ、公益財団法人三鷹市スポーツと文化財団を指定管理者とすることを含めて検討する。

さらに、三鷹市民に愛され、三鷹市民によって支えられる施設として、ボランティアが活躍する市民等との協働の仕組みの導入を検討する。

V 開館に向けた検討課題

1 建設に向けた寄付の募集

(1) 概要

「太宰治記念文学館（仮称）」及び「吉村昭書斎（仮称）」の整備にあたり、太宰治、吉村昭の関係者や愛好者、芸術文化の振興に理解の深い企業・団体等にも本整備事業への関心を高め、全国から寄付を募ることで、建設費の一部に活用する。

なお、施設開設後も継続して館の運営を支援する「友の会」等の創設や、管理運営費への寄付の枠組み等も構築する。

(2) 寄付を募るにあたっての基礎事項

① 目標額の設定

整備費用の約 1 割以上をめざす。

② 最低寄付額の設定

一口 2,000 円からとする。 ※「中田喜直歌碑建立」の時と同様

③ 寄付者への対応

寄付の口数に応じて、ネームプレートの掲出やフリーパスの贈呈、寄付者限定の内覧会などのインセンティブを設定する。

(3) 寄付の方法

寄付者への利便性を考え、より多くの人に関心を持ってもらえるよう、複数の手法を用いて寄付を募る枠組みを構築する。

① 市窓口での寄付の受付

「まちづくり応援寄付金寄付申出書」による申請を受け付け、納付書を渡した後、指定金融機関で寄付していただく。

② インターネットによる寄付

Yahoo 公金システムを活用したクレジットカード決済による寄付を受け付ける。

③ まちづくり応援寄付金（ふるさと納税）の活用

まちづくり応援寄付金（ふるさと納税）を活用し、三鷹市専用寄付サイトを新たに構築して寄付を受け付ける。

2 情報発信等

井の頭恩賜公園内というロケーション、太宰治・吉村昭というネームバリューからも、全国的にも高い注目が集まる施設であることから、事業の進捗状況について、市のホームページに特設コーナーを設けるほか、広報みたかにおいて定期的に周知する。

積極的にプレスリリースを行い、広く全国に情報を発信していくとともに、SNSの活用等、幅広い手法の活用を検討していく。

3 今後のスケジュール（予定）

平成 29 年度 基本プランの策定、基本設計・実施設計

平成 30 年度 建設工事

平成 31 年度 開館